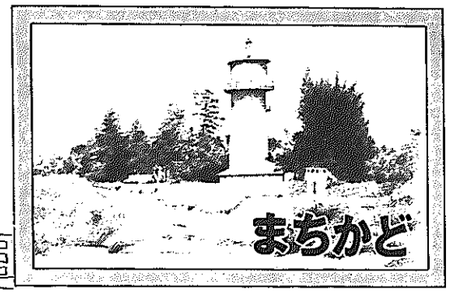
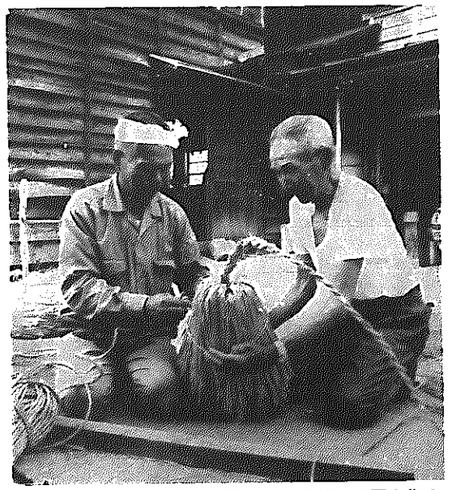
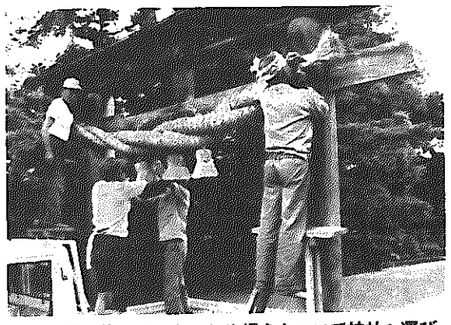


わらの束を挿してつなぎ合わせ、細縄を力いっぱい巻いていく。汗だくで作業が続けられる

つぶしてやわらかくしたわらを束ねて結い、しめ縄の材料となる小さな束を作る



しめ縄に下げる3個の「樽の口」と呼ばれる房を作る。部落でいちばん年を取っている人が作る習わしという



お神酒を飲んでから、しめ縄をかついで神社へ運び、鳥居に針金で取り付ける

こんにちは

古くから部落に伝わるしめ縄作り

新飯田古町部落

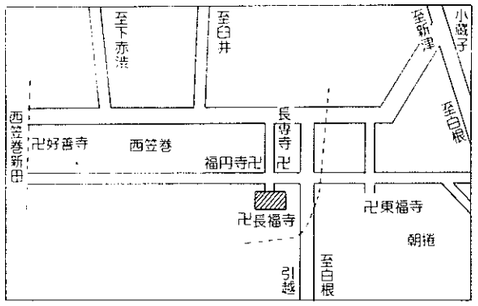
最近ではあまり見られなくなった「しめ縄作り」。古町部落では館部落にある神明宮に奉納するため、六月十六日のお祭りを前に、毎年「しめ縄作り」を行っています。これは、百年以上も前から受け継がれ、毎年六月十二日に行う伝統行事だそうです。

六月にしては、かなり強い日ざしの照りつける午後、部落の人たちは、農家の作業場に集まり、まず、稲わらをやわらかくするため機械を使ってつぶします。

「昔は各農家が稲わらを持ち寄ったんですが、現在は農業が機械化され、手に入りにくくなりました。このため特別に、しめ縄用として、昔ながらにかまで刈って天日乾燥したものを使っています」と部落長の関根さんは話します。

後でくずれたりしないように、結束したわらを力いっぱいつなぎそして長さ三・六メートル、重さ約五キロのりっぱなしめ縄が、三時間かけて出来上がりました。

このしめ縄は、宵宮の日に神社へ奉納するまで、部落の中で希望のあった家の玄関に下げておきます。



語る人
高橋イクエさん　五四
西笠巻

必死の願いで戻った鐘の音

私の思い出 昔のわが街

「ゴーン……ゴーン……」

午前七時、長福寺の鐘が響きわたるとき、過ぎ去った昔が懐かしく思い出されます。

およそ三十年前、戦争の傷跡も収まりかけたころ、私は四つの寺に恵まれたこの部落に嫁入りしました。そのころ、大東亜戦争とともに出征し、お国のために働いて返らない梵鐘を再びお寺に下げようと、私は部落の人たちと一緒に、砂利道を二里も四里も奉加に歩いたものです。みんなの必死の願いで、再び下げられた梵鐘を見たときは、本当に感激しました。

このお寺の幾つかある行事の中で、婦人に、番重視されたのが寺恩講です。この日はもち草だんごを作って親類に配り、お客を呼びます。また、嫁を迎えた家では必ず、姑さんが嫁を連れ、お寺に参り合掌したものです。

華やかで、しかもおごそかなこのぬくもりも今は姿を消しました。

白根人物伝

★星野恒

白根の出身で、天保十年（一八三九年）七月七日に生まれた。

万延元年（一八六〇年）江戸に出て、塩谷宕陰に学んだ。明治元年（一八六八年）帰郷し、水原学校の経営にあたった。

明治八年、東京に出て修史局三等協修となり、十四年に編集官に、二十一年には東京帝国大学教授となった。支那哲学、支那史学、支那文学の第一講座を担当した。二十四年に文学博士、間もなく帝国学士院会員となった。大正六年九月十日に七十九歳で亡くなった。

著書に国史纂要、史学叢説、国史眼（重野安繹、久米邦武同編）、豊城存稿二巻、騰稿一巻、竹内式部君事跡考などがある。

越佐大観、北越詩話、大日本人名辞書、越佐先賢墳墓誌、越佐の名士から

★鳴沢寡愆

広島大学名誉教授。明治二十四年五月十日、白根市で生まれた。

東京帝国大学を卒業し、広島文理科大学、広島大学、甲南女子大学の教授となった。筆名を花軒といい、広島市翠町に住んだ。

（新潟県年鑑から）

「私の思い出 昔のわが街」欄へあなたの思い出の場所を。連絡は企画財政課広報広聴係へ。